

142 塩名田本陣跡

しおなだほんじんあと



指定 市史跡 昭和25年12月1日
 所在地 塩名田
 所有者 丸山 良一



塩名田宿は、慶長年中に中山道が整備されたさいに、中山道の宿場の一つとして、北方にあった旧塩名田や、南方段丘上の舟久保・町田の住民が移住して新たにつくられたものである。塩名田丸山良一家には、慶長7年(1602)の「伝馬定書」と「駄賃定書」が伝えられている。これによって、慶長7年にはすでに塩名田宿が成立していたことがわかる。なお、この二つの定書は、いまのところ中山道信濃26宿に残るただ一つの原本だといわれている。

『中山道信濃26宿』によれば、天保15年(1844)の「明細書上帳」には、本陣新左衛門・善兵衛、脇本陣文左衛門・問屋新左衛門・文左衛門、名主彦兵衛とみえているという。この時点では、本陣が2軒、脇本陣が1軒、問屋が2軒あったことがわかる。新左衛門が本陣と問屋、文左衛門が脇本陣と問屋をかねていた。

この新左衛門家が丸山家で、同家は開宿当時は名主もかねていた。また、もう1軒の本陣善兵衛家は、延宝年代(1673~1680)から本陣を勤めるようになった。他方、問屋は新左衛門家とともに、当初は新左衛門家の筋向かいの彦市家が勤めていたが、享保6年(1721)より、新左衛門家の東隣の文左衛門家が勤めるようになった。つまり、新左衛門家と文左衛門家が隣同士で、半月交代で問屋を勤めていたことになる。こうしたことから、丸山家には貴重な関係資料が伝えられている。また、家も古い様式を残している。